
江戸川コナンと灰原哀の恋愛ものがたり

Nakazawakatsuyoshi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

江戸川コナンと灰原哀の恋愛ものがたり

【Zコード】

N4675BA

【作者名】

Nakazawakatsuyoshi

【あらすじ】

これから江戸川コナンと灰原哀の恋愛ものがたりを書いて行こうと思います。初めての小説なので緊張します。これからよろしくお願いします。

二年生の始業式

あれから2年たつた。相変わらず毛利家では「眠りの小五郎」の評判を聞きつけ依頼人が殺到している。その都度コナンは小五郎を眠らせていた。そうしてコナンも明日から三年生。最近心配している事がある。自分の顔が工藤新一になつて来ているのだ。蘭も最近不思議そうな目で見てくるし大変だ。

次の日、始業式の朝からの校長先生の話が長くてとても疲れた。少年探偵団は奇跡的にクラスを分けらなかつた。

歩美「よかつたー。またコナン君と同じで。」

光彦「えー。なんでコナン君なんですかー。僕の方が絶対にうつー。」

光彦は元太に押された。

元太「なんでコナンなんだよー。」

光彦「元太君何すんですかー」

光彦は元太に押し返すと一人は喧嘩を始めた。コナンはその様子を見て呆れていた。

灰原「どう? 高校生探偵さん 女に好かれ、他の男がやきもち焼いているを見て?」

コナン「へつ? なんのことだ?」

灰原「あなたつて本当に鈍感なのね。」

コナン「だからなんのことだよ。」

灰原「別にー。」

コナン「チエ、なんだよ、教えてくれたつていいのによ。」

灰原「よろしくね。」

「コナン、は？」

灰原「だつてクラスまた同じじゃない。」

「コナン、ああ」

灰原「また疲れそうね。工藤君私達に事件を巻き込まないでね。」

「コナン、わりかつたな。」

歩美「ちょっとコナン君、哀ちゃん、一人だけでコソコソしゃべらないの。」

光彦「そうですよー。私達は五人で少年探偵団なんですから。」

やがて三人とわかれ、灰原とコナンの二人でかえつていた。

灰原「まったく疲れるわー。校長先生の話」

「コナン、確かにあれはなげーよな。」

すると、いきなり灰原の顔が暗くなつた。

灰原「まあ、もう少しでこの生活から抜け出せるだらうナビ。」

「コナン、ん？ それどういう意味だ？」

「灰原、解毒剤が完成したのよ。」

「コナン、ほつ本当か？」

灰原「工藤君！ 嘉んではいられないわよ。まさか組織のこと忘れてないでしちゃうね。」

「コナン、ああ、わかつてゐよ。」

よつしゃー！ コナンは心の中で思つていた。

灰原とコナンの心情

その日、彼とわかれた後灰原はパソコンで解毒剤の資料の整理をしていた。

（もし、工藤君と私が元の姿に戻つたらどうなるのかしら？吉田さん達は私をどう思つたら？蘭さんは私をどう思つたら？そして彼は…？）

「よつ灰原！」

灰原「えつ？」

コナン「俺だよ」

灰原「あなたいつからここに？」

コナン「さつきからずつといたぜ。気づかなかつたのか？」

灰原「ええ。考え方してて。つてあなた何人の部屋勝手に入つてるのよ。」

コナン「お前はさ、一人で考えすぎなんだよ。たまには俺とかに相談してくれたつていいんだぜ。」

灰原「いいのよ。これは自分のことだから。」

コナン「お前かわいくねえなー。」

灰原「かわいくなくつていいのよ。」

コナン「まつそこがかわいいんだけどな。」

灰原「えつ？」

コナン「いついや、なんでもねえよ。」

灰原「あらそう。」

灰原の顔がまた少し暗くなつた。それに勘付いたコナンが
「お前さ、動物好きだよな。」

灰原「ええ。」

コナン「今度さ、いつしょに動物園行こうぜ。」

灰原「無理よ。私土日あいてないし。」

コナン「平日でいいじゃねいか。俺ら学校いかなくて内容わかる

だろ？たまにはいいだろ？」

灰原「それもそうね、付き合つてあげようかしら。」

コナン「本当にかわいくねえなー。」

言つてから、しまつた、と思つたが灰原が明るくなつてホッとした。
(なんで俺がこいつの事ここまで気にしてるんだよ。)
自分でもわからなかつた。

コナンが帰つたあと灰原はとても機嫌がよかつた。博士は何があつたのだろうと首をかしげていた。

帰宅途中コナンはやつきの気持ちについて考えていた。

(どうしたんだらうな、俺)

そう思つてみると、背後から気配を感じた。危険を感じ逃げたが相手の足は早く捕まつてしまい、そのまま氣絶してしまつた。

背後の謎の人

田が覚めると「ひまわり」やら自分の本当の家らしい。そして田の前には有希子がいた。

コナン「母さん！」

有希子「あら新ちゃんおきたの。久しぶりね。」

コナン「驚いたじゃねーか。やめろよな。こいつの。」

有希子「久しぶりに会う母親に対する挨拶にしてはそつがないじゃない。それにしても慣れてるでしょ、こいつの。」

コナン「だからって、睡眠薬でねむらせることないだろ。」

有希子「新ちゃんだって蘭ちゃんのお父さんを眠らせるじゃない。」

「ナーンは返す言葉がなかつた。

（こいつにはかなわない）

そう思った。

そのとき

有希子「新しい恋人さん見つけたそうじゃない。」

コナン「違う違う、いくら動物園にいっしょに行くからって灰原と恋人なんかじや…。」

有希子「あら？ 私哀ちゃんなんてひと皿も書かれてないけど？」

コナン「しまつた？」

有希子「そこの動物園に？ お金必要じゃない？」

コナン「いいよ。おっちゃんにもらうか。」

有希子「それじゃ悪いわよこれ持つていきなさい。」

有希子は封筒を渡した中には百万円入っていた。

コナン「こんなにいらねーよ。」

有希子「いいのよ。使わなくても持つといで。あと…これも持つといで。」

とコナンは巨大なダイヤモンドのネックレスを受け取った。

有希子「それはね私が優作に告白されたときにもうつたネックレスよ。もし理想の相手が見つかったらその人にあげて。」

コナン「いいのか?んな大事なもの。」

有希子「いいのよ。じゃ哀ちゃんと頑張って!」

コナン「だから違うって。」

そう言っても有希子は笑っているだけだった。

寝る前、有希子は飛行機のため帰った。

(俺つて灰原が好きなのか?)

(……んなわけねーか。)

明日は早いので早く寝よう。カチッ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4675ba/>

江戸川コナンと灰原哀の恋愛ものがたり

2012年1月12日22時48分発行